

変な音―夏目漱石

「修善寺の大患」から生還した漱石。人間心理の摩訶不思議さがこの「変な音」に詰まっているようで面白く読めた。

隣室から聞こえてくる「大根を卸すような音」、かたや「胡瓜を卸すような音」の正体が気になって仕方がない病厚い入院患者同士。その音の正体が判明した時、一方はこの世の人ではなくなったという。

人というものは、他人(ここでは隣室から聞こえて来る「変な音変な音」)の情報が気になって仕方がないという厄介なサガを本能的に持って生まれてくる。

『変な音』は、明日の命も知れという状況下にあっても、尚、他人への尽きない興味示す人間の心理に迫って、出色な作品である。

あらすじ

著者は自身が入院している時、一人一人仕切りで隔たれた部屋で、おろし金をすっているような奇妙な音を耳にします。どうやらそれは彼の隣から聞こえてくるようです。ですが気にはなっているものの、そこまで大した事でもない判断したために、彼はそのままにしておくことにしました。

それから著者はめでたく退院できたものの、体調が再び悪くなってしまい、再び入院することになりました。

しかし前回入院した時以上にその体調は深刻だった為に、彼は心身共に弱っていき、自分と立場が近いであろう、死を間近にした人々の事を考えはじめます。

ところがそうした彼の考えとは逆に、体調は快方に向かっていきました。

そんなある時、著者は以前入院していた時、例の変な音を出す患者を担当していた看護師と遭遇します。話を聞いていると、例の音はやはり看護師が胡瓜を擦っている音で、その胡瓜で足の火照りを冷やしていたといえます。

そしてどうやら例の患者も、著者が毎朝革砥(かわど)を磨いでいる音を気にしていた様子。ですが隣の患者は、それを運動器具を動かしている音だと勘違いして羨ましがっていたのだといえます。

そしてその患者は退院した後、すぐに亡くなってしまったそうです。

しかしこの話を聞いた後、著者は、自分が胡瓜を擦る音に焦らされた事と、例の患者が自分の革砥の音を羨ましく思い死んでいった違いについて考えずにはいられなくなっていきます。では、その違いとは一体なんだったのでしょうか。

ポイント

- 1、生と死の境界
- 2、生と死の認知の差
- 3、他者と孤独

1、東西方向と部屋の間取り

西→生 東→死

西←再入院の部屋・退院した部屋・変な音がした部屋→東

2、認知の差

変な音→大根おろしの音←きゅうりおろし

自らも音を発していた→皮砥を磨く音→運動をしている音

現実の見方と→生者

妄想による見方→死者

の差

3、他者の孤独

この作品では、〈他人の存在を感じようとするあまり、かえって孤独感を深めていってしまった、ある男〉が描かれています。

上記の問題に答える為に、まずは著者と変な音の患者に共通していた事を整理してみましょう。2人は病気によって入院しており、ほぼ個室のような部屋にいました。

そしてそれぞれがそれぞれの、生活音にある程度の興味を示していました。

つまり彼らは一人一人が隔離された空間の中で、その孤独や不安を埋めるように、自分以外の他人がそこにいることを感じようとしたのです。

そして著者の側は病状もそこまで深刻ではなかった為に、自分以外の人間が同じように入院している事にある程度の親近感をもって受け入れていました。

しかし、隣の患者の場合はどうだったのでしょうか。彼はそこまできている自分の死を悟っていました。それは彼がその時、見ていたもの、聞いていたものはその先関係なくなってしまう事を意味しています。そしてそうした事への孤独や不安は、著者以上に強かったはずです。

この事情こそ、著者が音によって自分の存在を主張している事を、通常とは逆に作用させてしまっていたのです。

つまり隣の患者は死を受け入れているあまり、彼の発する音を運動器具を動かす音という、現在の彼とは最も程遠いの部類の音と勘違いしてしまった事により、著者に対して親近感を持つどころかかえってその孤独感を増してしまっていたのです。

また彼は著者のそうした音を聞く度に、そうした思いを募らせていったのでしょう。他人を感じる事が、かえって孤独感を増すことだってあるのです。

感想

なんともまあ、病人の多い話である。舞台が病院である時点で、病人が多いのは仕方の無いことだが、まあ出てくる人出てくる人が死ぬ話である。胃癌で死に、胃潰瘍で死に、大腸癌で死ぬ。体調が良くなったのは食道癌の者と自分だけだ。そんな死が身近にある不安なところではきっと少しの物音も気になるのだろう。

隣の部屋から変な音がする。それも何かを擦るかのような。日常生活で生きていても、何の音か分からないが気になる音と言うのはある。だが、殆どは何の音か分かるものが多い。上からゴトリという音がしたらそれは十中八九椅子を動かした音だし、隣から漏れてくるピアノの音は勘ぐるまでもなくピアノの音に相違ない。日常生活では凡そのことは想定ができるのだ。

それに対し、病院というのは非日常である。非日常的な空間では自分の知らない事、自分の想定できない何かが行われていても、不思議はない。そのため、隣から漏れる音の正体が分からないということがおきうる。夜中に胡瓜を擦る人がいると言うのはなかなか想像のしようがない。それも熱った足を冷やすために胡瓜の擦ったものを塗ると言うのは、僕が現代人でおばあちゃんの知恵的なものを知らないのが原因かも知れないが、なかなか分かるものではない。

そういった謎の音を、死の恐怖に震えながら聞いていたのである。どういった気持ちだったのだろうか。文には脳神経を刺激するとか焦らせるとか書いてあるので、あまり良い気持ちで聞いていなかったのは確かである。しかし、この変な音が聞こえると言うのはただただ嫌なものだったかというとなんな事は無いように思う。

隣人の音が聞こえる。隣人の音が聞こえなくなる。これらの二つは何を意味するか。隣人の音が聞こえるということは、隣に人がおり、確実に生きているということが分かる。しかし、音が聞こえなくなると、それは退院した可能性もあるが、死んでいる可能性もある。

胃潰瘍の者はげえげえと吐く音を響かせていた。しかし、いつしかその音が聞こえなくなり、主人公は回復したのだろうと考えたようだが、実際には声をだす気力さえも失

われる程死に近づいていたのである。

病院では死はとても身近にあり、互いの生を知るすべは音しか無い。そんな中で聞こえてくる変な音は神経を逆撫で擦る音だったとしても、隣の人が生きているということが分かるホッとする音だったのでは無いだろうか。

この主人公は生来大変消極的な人であるような気はするが、改めて考えてみると、隣の人に悪いからと言って、隣を覗かず、話しかけず、関係を持たないと言うのは、なんとももったいないことのように思える。病院に入っているということは誰しも体調が悪く同じような恐怖を持っている。いわば同志のようなものでは無いだろうか。お互いに話をすることができれば、死の恐怖の克服にもつながるような気がする。

だが、実際どうなのだろうか。僕自身は大病をして入院したことは無いから分からないが、入院している者同士で話をすることは精神衛生上良い事なのだろうか。何となく単純に互いにコミュニケーションを取る事それ自体が精神に対して好影響を与える体で書いたが、実際は負と負のオーラの相乗効果によって互いの体調が悪化するということもあり得るのだろうか。もしそうだとすると、お互いの顔を見ず、音を聞きあうことで互いの生を確認し合うというぐらいの関係性の方が良いのかも知れない。

そして、最後に主人公は隣人も自分の音を気にしていたということを知る。まさにコミュニケーションそのものだ。お互いがお互いの音を気にし合う。そして、片方は死んでしまい、もう片方は回復する。そこに何の違いがあったか考えると言うのはきっと反語表現だろう。何の違いがあったのか、いや無いだろう。

皆が皆死に直面しており、そこに例外のある人はいない。それでも体調が良くなる者、悪くなる者という違いは出てくる。まさに運命と呼べるものだろう。これは病院だけに当てはまるものでもない。人生生きていて、同じようにしていても何らかの違いは出てくるものだ。ただ、自分が生きているということだけでも、死の運命を毎日乗り越えているという風に考えることもできる。

日々を生きていける。ただ生きていることの幸せを噛みしめる。そんな話なのでは無いかと締めくくる。

作品梗概

著者：夏目漱石

初出：1911年（大阪朝日新聞）

<http://www.aozora.gr.jp/cards/000148/card763.html>

※リンクは青空文庫です

隣の病室から聞こえてくる奇妙な音をテーマに、関わる人々の生と死を描いた作品。物語は、寝ていた漱石が奇妙な音で目を覚ますシーンから始まります。

隣の病室から響いてくる、何かをすりおろすような音。それはまるで、大根おろしのよう。しかし調理場までは遠く、料理は勿論菓子も禁止という病室の中で、一体誰が何の目的で、何をすりおろしているのでしょうか。

音は度々聞こえて来るので非常に気になるのですが、結局それが何であるのか確かめないうちに、隣部屋の患者は退院してしまいます。

そうして三ヶ月後、病院の別の部屋に舞い戻る事になった漱石は偶然、あの奇妙な音のした部屋にいた看護婦と知り合ったのでした。

音の真相を知っているであろう看護婦。しかし、漱石は音については何も訊きません。ところが驚いた事に、看護婦の方から質問されるのです。あなたの部屋から毎日聞こえていた、あの奇妙な音は何ですか、と。

こういうとまるでホラーのようですが、別に怪奇ものではありません。当然ですが、あの奇妙な音については至極当たり前のオチがつきます。

しかし、修善寺の大患で生死の境を彷徨った漱石にとって、重要なのは音の事ではありませんでした。彼が心に留めたのは、その部屋にいた患者のその後について。

漱石の部屋から響く奇妙な音をしきりに気にしていたその患者は、聞けば、退院後まもなく亡くなったのだそうです。

病室の壁を隔てて交錯した、ふたつの謎の音。共に音を気にした二人の患者。しかし、一方は死に、一方はなお生きている。またしても漱石は、そんな二人を対比して考え込まずには居られなかったようです。

物語には、修善寺での出来事についてははっきりとした描写はありません。しかし、季節や期間、その他の病室の患者達の描写が、ぴたりと「思い出す事など」のラストと一致しているのです。従って、奇妙な音を聞いたのは修善寺に行く前で、種明かしは修善寺から生還した後の出来事と考えて良いでしょう。

物語の背景を知らずに読んでしまうと、この作品の重さは伝わりにくいと思います。しかし、先に「思い出す事など」を読んでいると、終盤の漱石の気持ちがよく理解出来るので、単品で読んだ場合とは大分印象が異なる筈。

文章はテンポよく、これのみでひとつの短編と見なしても十分に魅力のある作品ですが、やはり、是非とも「思い出す事など」を読み終えてから読んで欲しいですね。それは言うなれば、修善寺の大患の前日譚と後日譚。大患にまつわる、もうひとつの物語です。

思い出すこと

これは病と日常についての文学なのですが、一人称の日記を書いているのにまるで三人称で書いた小説のように客観的な印象を受けます。おそらくこれほど病について詳細で深く考察された文学作品は他にないと思います。

いま暗いものは読みたくないという方はちょっと避けてもらったほうがいいと思います。

病に関する文学は、どうも読み手の自分たちにとって架空のものではなく、リアルなもののように思えます。程度の差や時期の違いはあっても、何年後か何十年後か百年後か、生きている間に誰もが体験することなので、他人ごとに思えないような近さがあるのだと思います。

漱石のこの本を読むと、こんなに冷静に困難に立ち向かえないな、と思いました。痛いにも弱いです。漱石は、体が弱っても頭脳や心情は弱らなかつたようなんです。そこがすごいなと思います。偶然なのか、漱石自身の意志の強さによるのか謎なんです。

漱石の本を読み込んで、多くの脚本を書いた監督が、ある随筆で、漱石文学の全体像について「漱石は裏切りについて熱心に探求した」と、どんなに親しくした相手であっても、裏切りが生じることはあり得るんだ、ということを漱石が示したんだ、と言うんですよ。ぼくはびっくりして今まで読んだことのある漱石作品を振り返ってみたんですが、たしかにその通りなんです。言われてみるまでまったく気づかなかつたんですが、漱石作品が怖いと感じていたのは、そういうあつてほしくない現実を深く書き込んでいるからなのだ、と思いました。その漱石が、自分の大病のことについて分析して描き出している作品です。

漱石は、余裕のある文学作品や思想についてを高く評価している、という随筆を残しているのですが、この作品ではこんなことを書いています。

1. 余は病に因ってこの陳腐な幸福と爛熟な寛裕を得て、初めて洋行から帰って平凡な米の飯に向った時のような心持がした。

漱石がはじめてのイギリス大旅行をしたあとにですね、処女作の「吾輩は猫である」が書かれたんです。大患をしたあとにそういうころの心持ちになったと記してます。漱石は続けてこう書きます。

2、「思い出す事など」は忘れるから思い出すのである。ようやく生き残って東京に帰った余は、病に因って纔(わず)かに享(う)けえたこの長閑な心持を早くも失わんとしつつあると。

読みすすめてゆくと、ちょっと引きこもりの人とか、調子が良くない人に嬉しいことが書いてあったりします。

3、病気をするとだいぶ趣が違って来る。病気の時には自分が一步現実の世を離れた気になる。他も自分を一步社会から遠ざかったように大目に見てくれる。こちらには一人前働かなくてもすむという安心ができ、向うにも一人前として取り扱うのが気の毒だという遠慮がある。そうして健康の時にはとても望めない長閑かな春がその間から湧いて出る。この安らかな心が、すなわちわが句、わが詩である。

漱石はこの作品を、近しいものへの近況報告の手紙として、書いています、と記しています。健康的に生きていられることが、かなりありがたいことなんだなあ、と思いました。